

社会資本ストックの集約・再編によるコンパクトシティの形成手法

北海道大学大学院工学研究院教授 瀬戸口 剛

序章：研究の背景と目的

0-1. 研究の背景と目的

拡散した都市構造を持つ多くの地方小都市では、人口減少、財政悪化、社会基盤の老朽化により、居住環境の悪化、公共サービス水準の低下、社会基盤維持補修による財政負担の増加が深刻化している。財政負担を低減し公共サービスの質を維持しながら、安心して生活できる環境を維持していくためには、都市の拡大を抑制するだけでなく、人口規模に合った集約型のコンパクトシティを形成していく必要がある。しかし、単に物理的な都市構造として集約型の都市像と捉えるのではなく、住民の住替意向や地域のクオリティオブライフ（以下 QOL）を支え、生活実態や生活意向に即した将来像を描かなければ、都市像は共有されず、実現されないことが考えられる。したがって、住民の QOL を担保しながら集約化された都市像を考えていく必要がある。

本論では、住民の生活意向の把握から、生活意向に基づいた集約化した将来都市像の類型パターンを明らかにすることで、住民が選択しうる都市像を示すための計画プロセスを明らかにすることを目的とする。

0-2. 研究の対象

かつて旧産炭地として栄えた北海道夕張市は、炭鉱の鉱口に合わせて分散的に市街地が形成されてきたが、現在では人口が最盛期の 1/10 にまで激減した。かつての人口規模を前提とした都市形態と現在の居住形態との差から、社会基盤維持負担の増大やコミュニティの崩壊等の問題が深刻化し、地域の生活を維持していくために、都市を集約化していくことが求められている。しかし、一方で地区への強い愛着を持つ住民が多く、現在の居住地区に住み続けたいと考える住民の意向や、多様化したライフスタイルや住民の QOL を担保するものでなければ、集約型の都市像は共有されないものと考えられる。したがって、本論では北海道夕張市を対象として研究を行った。なお、夕張市の詳細な概要や地域特性・課題については、1 章で述べるものとする。

0-3. 研究の構成と都市像を示すプロセス

【第 1 章：夕張市の概況と地域特性】

研究の対象である夕張市の概況と課題を整理する。また、文献から夕張市の地域形成を整理し、地域特性を明らかにする。

【第 2 章：計画研究の方法（夕張市住民の生活意向の把握）】

既往の調査研究や市内の広報紙を用いて生活の状況を整理し、夕張市で重視すべき QOL の視点を明らかにする。次に 1 章で明らかになった地域特性から夕張市民の中から調査対象を選定し、QOL の視点を基にした住民へのヒアリングから住民の生活実態と、夕張市の将来像を考える上で担保すべき生活意向を明らかにする。

【第 3 章：計画研究の方法（住民の生活意向に基づいた都市像）】

2 章で明らかになった個人の生活意向に基づき、その生活意向を担保する都市像を、都市構造と生活像の観

点から導き、各個人の生活意向を担保する都市像を明らかにする。

【第4章：計画研究の方法（生活意向に基づいた都市像の類型）】

生活意向を支える都市構造の観点から、3章で明らかになった各個人の都市像を類型化し、それぞれのパターンで住民の QOL を達成する方法と、実現する生活像を整理し、住民が選択しうる都市像を示す。

【第5章：都市像の評価】

5章で分類された都市像を生活意向の観点から比較し、それぞれの都市像についての、利点・欠点・実現へ向けた課題を明らかにする。

【終章：生活意向に基づいた集約型都市像と計画プロセス】

本研究を通して、生活意向に基づいた集約型都市像の計画プロセスについて整理・考察する。

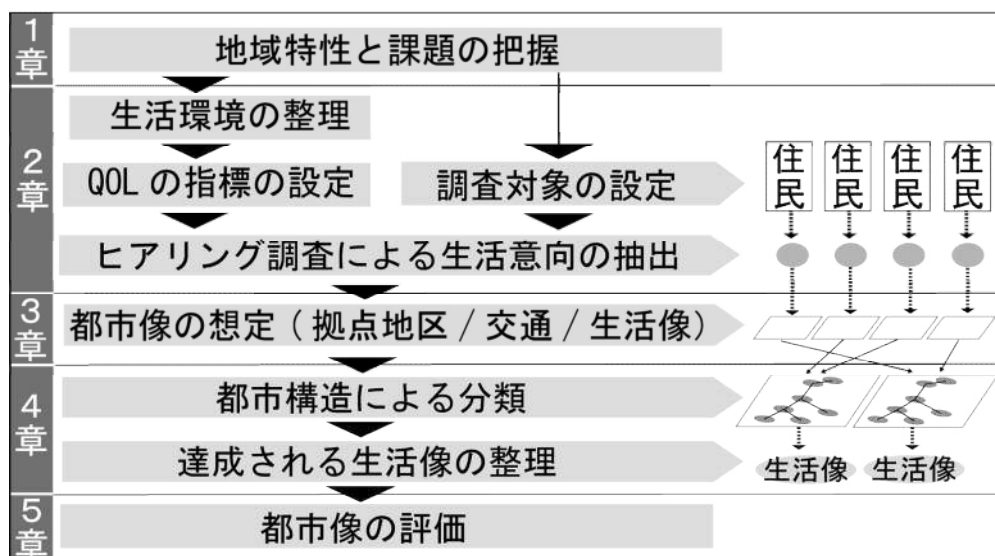


図 0-1 論文の構成と都市像を示すプロセス

第 1 章：夕張市の概況と地域特性

1-1. 市街地の概況

(1) 用途地域の指定状況

夕張市では都市計画区域 9,363ha のうち、用途地域が指定されている地域は 1,274ha ある。12 種類ある用途地域のうち、夕張市では 9 種類を活用し、地域の状況に応じて指定している（表 1-1）。大きく住居系、商業系、工業系で分けると、夕張市の用途地域の指定状況は、それぞれ 61%、8%、31%の比率となる。

(2) 公営住宅の地区別立地状況

夕張市では、各市街地に公営住宅等が分散立地しており、合計管理戸数は 4,255 戸である（図 1-1）。このうちの約 3 割が空き家となっており、地区別に見ると真谷地地で 50.4%、清水沢地区では 42.5%となっており、で空き家率が高くなっている（表 1-2）。

表 1-1 用途地域指定状況

種別	面積 (ha)	構成比
都市計画区域面積	9,363	—
用途地域指定面積	1,274	100.0%
第 1 種低層住居専用地域	—	—
第 2 種低層住居専用地域	17	1.3%
第 1 種中高層住居専用地域	230	18.1%
第 2 種中高層住居専用地域	218	17.1%
住居専用系 小 計	465	36.5%
第 1 種住居地域	193	15.1%
第 2 種住居地域	120	9.4%
準住居地域	—	—
その他住居系 小 計	313	24.6%
住居系 小 計	778	61.1%
近隣商業地域	29	2.3%
商業地域	72	5.7%
商業系 小 計	101	7.9%
準工業地域	241	18.9%
工業地域	154	12.1%
工業専用地域	—	—
工業系 小 計	395	31.0%

表 1-2 地区別公営住宅空家率

地区	空家率 (%)
本庁	17.6
若菜	14.5
清水沢	42.5
清栄・清陵 (清水沢)	37.7
南部	20.8
沼ノ沢	6.4
真谷地	50.4
紅葉山	21.5

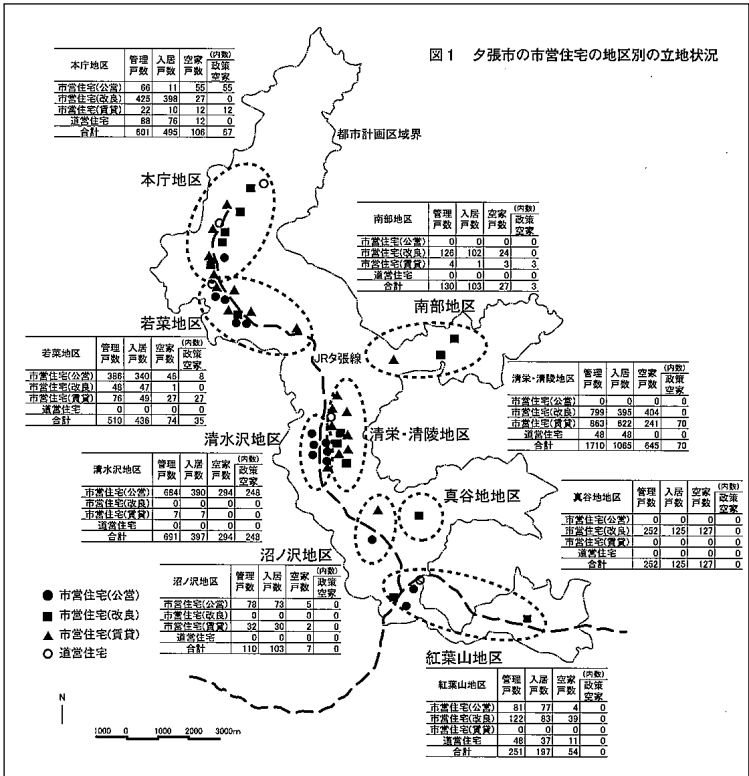


図 1-1 市営住宅の地区別立地状況

1-2. 将来予測

(1) 人口の減少と高齢化の進行

①人口の減少

夕張市の人口は、ピーク時の 1960 年（昭和 35）当時の 107,972 人から、2005 年（平成 17 年）には 13,001 人へと大きく減少している。人口の減少傾向は今後とも続くものとみられ、国立社会保障・人口問題研究所による推計では、25 年後の 2035 年には 5,178 人へと、現在の人口からさらに半減するものと予想されている（図 1-2）。

しかし、現在の夕張市の市街地の基本は、かつての人口規模を前提とした形態で形づくられている（図 1-3）。かつては存在していた人口集中地区も、現在は存在しておらず、低密度な居住へ推移したことが分かる（表 1-3）。

人口の減少がさらに進むことによって、まちづくりの上で様々なひずみが生じることになる。このため、人口の大幅な減少に見合うように、道路や公共施設など社会資本とその維持管理、さらには医療・福祉など行政サービスの提供のあり方などを、抜本的に見直していくことが喫緊の課題となっている。

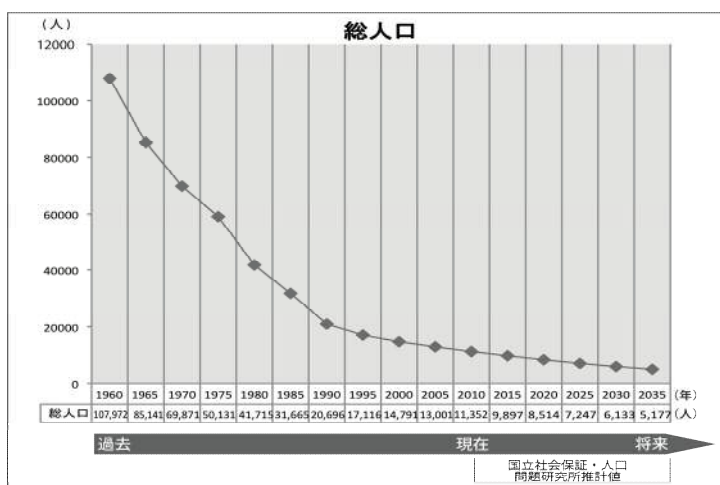


図 1-2 総人口の推移と予測



図 1-3 都市計画区域面積の推移

表 1-3 DID 地域の変化

DID 地域（人口集中地区）の変化

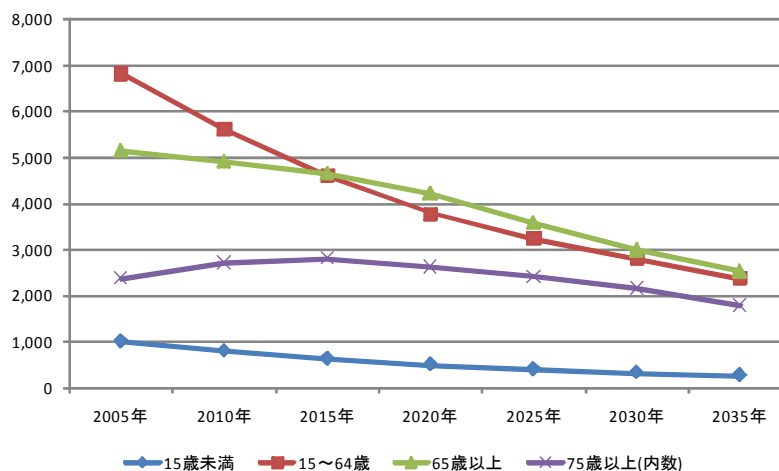
年	人口 (人)	面積 (km²)	地域
1961 年	72,352	10.0	平和以北、鹿島
1971 年	54,417	13.2	平和以北、鹿島、南部、清水沢
1976 年	34,302	9.9	平和以北、清水沢、南部
1981 年	27,438	8.0	平和以北、清水沢、南部
1986 年	18,400	6.1	平和以北、清水沢、南部
1991 年	5,526	2.5	平和以北、準清水沢
1996 年	なし		

②高齢化、少子化の進行

人口の大幅な減少に伴って、夕張市の人口構造も大きく変化するものと推察される。2005 年現在 1022 人、7%だった 15 歳未満の人口は、2035 年にはそのおよそ 1/4 の 267 人で、人口の 5%へと大きく減少し、65 歳以上の高齢者、中でも 75 歳以上の後期高齢者の占める割合が確実に増えることが予想されている。

また、15歳以上65歳未満の生産年齢人口は、2015年以降には高齢者人口を下回ることが予想され、農業生産の担い手不足など、地域経済の維持に大きな課題が生じると考えられる。

さらに、人口の半数がお年寄りになり、夕張市の人口構成の最も多い層になることから、これら高齢者層の居住の安定化を図ることが必要になる。車を運転できなくなったお年寄りが、医療や買物などの利便性に優れた町へと住替えるケースが増えているが、自動車に依存せずとも安心して安全に暮らし続けることの出来る、住宅と住環境を整える必要がある（図1-4）。



総数	2005年	2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年
15歳未満	1,022	810	641	503	405	329	267
15～64歳	6,819	5,620	4,606	3,779	3,253	2,810	2,384
65歳以上	5,160	4,922	4,652	4,231	3,586	2,996	2,531
75歳以上(内数)	2,384	2,714	2,819	2,630	2,417	2,165	1,794
合計	13,001	11,351	9,898	8,515	7,245	6,133	5,181

図1-4 世代別人口の予測

（2）社会資本維持管理負担への対応

公営住宅や道路など社会資本の維持管理や修繕に要する費用は、人口減少が進む夕張市の大きな負担になっている。今後、より一層人口の減少と高齢化が進むと、地域の持続的な維持には、社会資本の維持管理コストを削減し、効率的な地域経営を図ることが不可欠になる。平成21年に国土交通政策研究所の行った調査によると、公営住宅、道路、橋梁、上水道、下水道、公共施設、道路除雪・凍結防止に関する維持管理費及び修繕費等は、このまま推移すると、2039年には市民1人あたりのコストが現状（2005～2007年の平均）の3倍近く、2.72倍になるものと予想される（図1-5）。

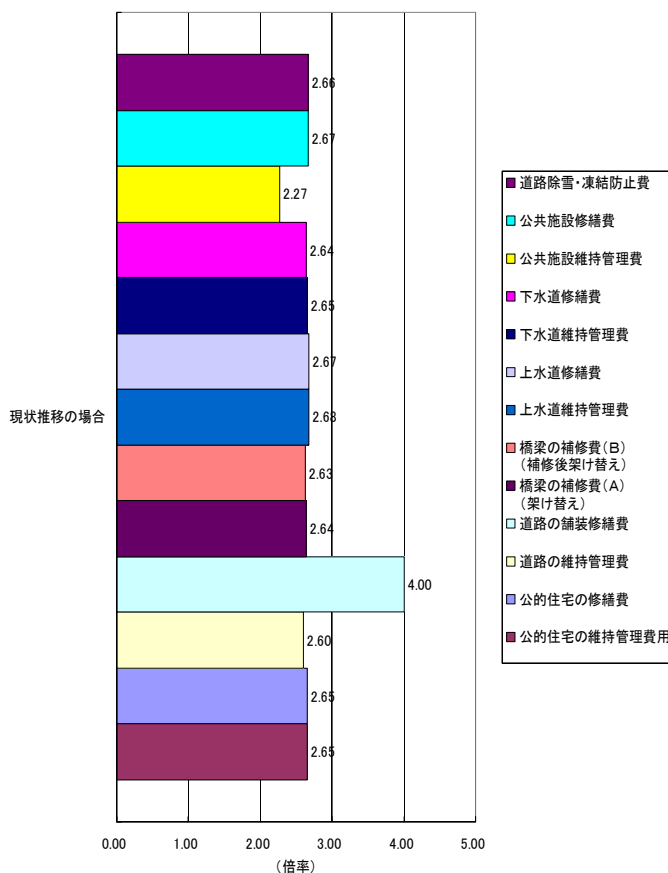


図1-5 社会資本維持管理コストの増加の予想

1-3. 夕張市の地域形成と地域特性

1-3-1 夕張市の地域形成

(1) 夕張市の始まり

夕張市の歴史は、明治 21 年北海道庁「坂市太郎」氏がシカホロベツ川上流に石炭の露頭を発見したことに始まる。

明治 23 年最初の炭鉱が開発されてから次々に炭鉱が開鉱し、明治 30 年に由仁村戸長役場より分離、登川村戸長役場として独立した。

明治 39 年 4 月、2 級町村制が施行され、登川村役場となった。

大正 7 年 2 月、登川村を夕張市に改名し、翌年 1 級町村制が施行された。この時点での戸数は 1 万戸、人口 4 万人であった。

昭和 12 年、夕張町開基 40 周年に日韓戦争が勃発し、そのため石炭は一層重要な資源となり増産された。良好な石炭を採掘し、国内のエネルギー供給基地として飛躍的な発展を続けた本市は昭和 15 年 64,998 人、昭和 18 年 73,953 人となり、同年岩見沢と共に人口規模が全道 9 番目の市となった。

その後も人口の増加は続き、昭和 35 年 4 月には 116,908 人で、夕張市最多の人口となった。

(2) 炭鉱産業の衰退

昭和 35 年には 17 の大手並びに中小の炭鉱があったが、昭和 34 年の石炭鉱業合理化政策「新合理化長期計画」が策定されてから、昭和 37 年～46 年までは中小炭鉱の閉山が続き、非能率鉱のスクラップ及び能率鉱のビルド（スクラップ&ビルド策）が行われた。

その後、昭和 51 年からの新石炭政策により、海外炭の開発・輸入がされるようになり、国内炭の需要が減少し、市内の炭鉱が相次いで閉山した。

昭和 47 年以降は、大手炭鉱の閉山が続いたが、大手炭鉱の従業員は 1500～2000 人で、閉山になると 3/4 の人々は、市内に職を求められず、市外に転出していった。

平成 2 年 3 月、三菱南大夕張炭鉱の閉山により、夕張市から石炭産業は完全に消滅した。

(3) 産業の振興

夕張市は、石炭産業に大きく依存して発展してきたため、石炭産業の盛衰に大きく影響を受けてきた。しかし、石炭は有限資源であり、近い将来石炭に代わるエネルギーの変革が来ることを認識し、石炭産業が現存しているうちに、産業構造の転換や多角化を目指し、企業誘致を実施してきた。

だが、炭鉱閉山による暗いイメージや炭鉱産業の荒廃ぶりに企業進出を断念した企業も少なくなかった。

そこで、夕張市はまず環境を整備して、まちのイメージチェンジを図らなければならないと考えた。

表 1-4 夕張の工業団地

工業団地	団地面積(11ha)	分譲時期	企業数
夕張	11.2	昭和 41 年	4
第 2 夕張	5.5	昭和 47 年	3
清水沢	17.2	昭和 49 年	4
清水沢第 2	6.6	昭和 60 年	6
夕張緑陽	11.0	平成 8 年	1

(4) 観光開発

イメージチェンジを図るための事業として、観光開発を検討したが、いわゆる観光地につきものの観光資源がなかった。そこで、かつて炭鉱を採掘していた本物の炭鉱（模擬鉱）を核に、石炭産業がいかに日本経済に大きな役割を果たしてきたかという歴史を後世に残すことを目的として、昭和 55 年 7 月「石炭博物館」を建設、第 3 セクターの夕張観光（株）を建設し、更に観光開発を展開した。

しかし、観光事業開始当初の観光ブームから徐々に陰りが見え、民間企業の撤退、「炭鉱から観光へ」をキャッチフレーズに推進してきた各種事業費の負債の累積も進み、平成 18 年度に夕張市が財政再生団体（平成 21 年から法改正に伴い財政再生団体）に転落、第 3 セクターの経営破綻により、平成 19 年度からは指定管理者制度により、運営を委託している。なお、平成 22 年 4 月末現在で、加森観光（株）の 100%出資による現地法人「夕張リゾート（株）」が 13 施設、（株）花畑牧場が 3 施設、NPO 法人ゆうばり観光協会が 1 施設、三菱興産（株）が 1 施設を運営している。

（５）農業の振興

夕張市の農業は、河川流域以外農耕最適地を求められず、経営規模が零細で土性及び気象条件に恵まれていないため、昭和 30 年前後から自然条件、環境に即した農業振興項目が模索された。この胎動の中で出された方向性は、地域特性を生かし、特異性と収益性を備えた特産そ菜づくりを行うことであった。メロン、アスパラガス、長芋、いちごをそ菜として選定し、農業者、農業関係者一体となり、特産そ菜づくりがスタートした。中でも、メロンは昭和 35 年にメロン組合が結成され、昭和 36 年にアールスメロンとスパイシー種の交配に成功し、一代雑種の「夕張キング」が誕生した。以来、良質品の生産技術と農協共販体制の確立に努め、全国の夏の果実として名声を博する基幹作物として成長した。

炭鉱産業に力を入れていた夕張市では、農業は市からの十分な援助を受けられず、市にも、炭鉱関係者の街にも頼らずに、独自の発展を遂げてきた。そのため、農業関係者と炭鉱街に住む住民との関わりは少なかった。

1-3-2 地域形成と炭鉱産業の関連

夕張市は人未踏の山の中に露頭が発見されたため、開発が進められてきた純粋な炭鉱都市である。地形が複雑で、広い後背地がなく、交通が不便であったため、強力な関連産業が発達せず、1 つの封鎖的な世界を作りあげていった。そのため、炭鉱会社の自治体に対する政治的影響を大きくしてきた。炭住街では、私生活面さえ規制するほどの支配力であった。

炭鉱会社は福利事業として食料品や日用品の販売を行い、一方指定商を設け、万屋式に何でも販売してきた。そのため、一般商店は炭鉱の購買力に依存し、専門化を図らないと生存が厳しい状況にあった。炭鉱従事者は収入も多く、退職後も黒手帳と呼ばれる一般より高い金額の年金を得ることができる。市内では、炭鉱関係者とそれ以外の職業に従事するもので、大きな身分格差が生じていた。

また、炭鉱都市の特徴として、各炭鉱ごとに小市街地を形成してきた。炭鉱街では、以下のような特有な文化が存在した。

<友子制度>

東北からの移住によって移入された鉱山特有の「ギルド」に相似した組織である。労働者間の技術指導、相互扶助、労働の凱旋などの役割を持ち、各炭山単位で運営し、厳格な内部規律があった。当時友子制度に入るとは、夕張で一生を暮らすことを意味した。

<炭鉱住宅>

炭鉱住宅は炭鉱で働く鉱夫の住まいであり、長屋、飯場とも呼ばれた。10 畳ほどの部屋に台所と玄関が付属し、家賃と水道と石炭は無料であった。古いものは、水道やトイレは屋外で共同使用であった。地区には無料の共同風呂を設けており、住民にはとって共同風呂は社交の場であった。こうして共同生活を送り、住民同士は親戚以上の付き合いを築き上げていった。

＜炭山祭り＞

炭山祭りは、死と隣合わせで炭鉱で働く人々の安全を祈祷する祭りであり、全ての炭鉱ごとに行われた。住民による神輿、露店、芝居などの催し行われ、交通の便がなくテレビがない時代の唯一の娯楽であった。こうした地域行事を通して、炭鉱ごとのコミュニティをさらに強いものにしていった。

1-3-3 地域特性

このように産炭地時代には、危険な炭鉱での仕事から固い絆、篤い人情が生まれ、長屋での共同生活から強い連帯感が生まれ、住民は居住地区への強い愛着を持つようになった。また、農業、商業、炭鉱関係等、職業の違いにより、身分格差や生活の価値観の中での違いが見られ、居住地区も異なっていた。しかしこのような特徴は産炭地時代のものであり、現在では存在しないものが多い。

したがって、産炭地時代の生活の実態、産炭地時代の夕張で生きてきたかどうか、どこの地区に居住しているかで、生活の価値観に違いが表れることが、夕張市の地域特性として挙げられる。

第2章：計画研究の方法（夕張市住民の生活意向の把握）

2-1. 夕張市で重視すべき QOL

既往の調査研究や市内の広報紙を用いて夕張市の生活環境の実態を整理した。そこで、夕張市で重視すべき QOL の視点として、「医療」「教育」「利便性」「コミュニティ」「住宅環境」「余暇」「経済」「地域性」が抽出された。

この8つの視点を基に、さらに夕張市の生活環境を整理し、生活意向を構成する項目を抽出した。

2-2. 調査対象の選定

夕張市の地域形成の変遷から、地域の形成の特徴として、夕張市が産炭地であった時代を生きているかどうか、どの地区に居住しているかによって地区への愛着や生活意向に大きな差が見られることが明らかになった。

そこで、各地区高齢者、勤労者を調査の対象として選定し、合計 29 名にアンケート・ヒアリング調査を実施した。各地区の高齢者は、個人の生活の実態とともに地区の生活の実態を把握するために、町内会組織の関係者とした（表 2-1）。

表 2-1 アンケート・ヒアリング調査対象者

	本庁	若菜	清水沢	南部	沼の沢	真谷地	紅葉山	市外	合計人数
未成年者	15								1
勤労者	28 37 40 41 40 48	34 36 37	32 42 59	35	36	30	27 37 55	25 40 42	21
高齢者		74		○	63	68	66		7
合計人数	8	4	4	2	2	2	4	3	計 29

凡例 女性：○ 男性：□ （記号の中身は年齢）

2-3. 住民の生活実態と生活意向

2-3-1 調査の方法

生活の実態と生活意向を細かく把握するために、2-1 で明らかになった QOL の 8 つの視点に基づき、2-2 で選定した夕張市住民に 2010 年 8 月 30 日から 2010 年 10 月 19 日にかけてアンケートとヒアリングによる調査を行った。

アンケートの内容は 2-1 で抽出された生活意向を構成する項目について、各項目で重要度と満足度の 2 つの指標を用いて評価を行うものである（表 2-2）。

表 2-2 「重要度」と「満足度」の評価方法

項目	重要度	満足度
内容	現在の住民が今後暮らしを続けていく上で、その項目がどれほど重要かを住民の主観によって点数化した指標であり、重要度 1 点から 5 点で評価を行った。	現在の居住環境に対してどの程度満足しているかを図る指標であり、満足度 1 点～5 点で評価を行った。
指標	重要度 1 点：重要でない	満足度 1 点：非常に不満
	2 点：あまり重要でない	2 点：不満
	3 点：どちらともいえない	3 点：どちらとも言えない
	4 点：重要	4 点：やや満足
	5 点：大変重要	5 点：満足

さらに、各対象者につき1～2時間程度、生活の実態と生活意向についてヒアリング調査を行った。ヒアリング調査により、アンケートでは把握しきれない詳しい生活の実態と生活意向を把握した。

2-3-2 住民の生活実態と生活意向

アンケート項目の生活意向に重要度の重みを付けた生活意向に加え、ヒアリング調査によって明らかになった、特に重点をおいていた生活意向と追加すべき新たな生活意向を把握し、各住民が重要視する生活意向として把握した（図2-3）。

下表に、以上の方法で明らかになった各住民の生活意向を全ヒアリング対象についてまとめた（表2-3）。

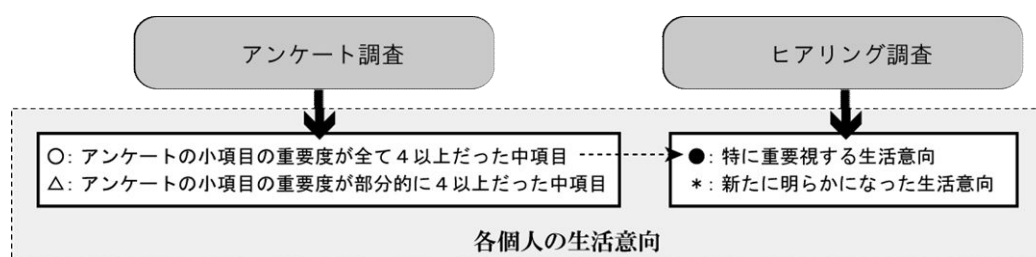


図2-3 個人の生活意向を把握する調査方法

表2-3 夕張市住民の生活意向

	中項目	小項目（●:特に重要視する生活意向 * :追加すべき新たな生活意向）
医療福祉	生活圏内で簡単な医療・福祉を受けることができる	地区にかかりつけの病院がある
		公共交通を使って自力で通学できる
		介護が必要な場合にサービスを受けたり入れる施設や支援がある
	いざというときに、高度な医療を受けることができる 安心できる環境にある	●高齢者が生活圏内で医療や介護を受けるための公共交通や施設が整っている
		市内に専門的な医療を受けられる場がある
		市内に入院できる施設がある
	近所の付き合いで他人の世話をし合える	市内に夜間診療のできる病院がある
		近所の付き合いで他人の世話をし合える
		●住民同士で見守り合いができています
		●声かけや見守り合いなどの近所の付き合いで、生活のサポートができる
教育	子育て・教育のための環境が整っている	* 介護を受けながら夫婦で暮らすことができる
		* 市外で専門的な医療を受けることのできる体制が整っている
		* 医療機関が独自の送迎方法を持ち、高齢者が自力で安心して通学できる
		* 市内に小児科の病院があり、子育てにおいて安心できる環境にある
		* 知的障害者が必要な場合に介護やサポートを受けることができる環境が整っている
	子どもの遊び場がある	子どもを住んでいる地区の小学校に通わせる
		子どもの遊び相手(同年代の子ども)が近くに住んでいる
		子どもが徒歩や公共交通を使って自力で通学できる
		●低学年の子どもが安心して通学できる
		行動範囲内に安全に遊べる公園がある
		放課後立ち寄り場所や遊ぶ場所がある
		プールや児童館など子どもが遊ぶための施設がある
		●保護者の目の届く範囲に子どもの遊び場がある
	保護者が、共働きや買い物などのために自由な時間を持つことができる	●人が集まる場所に子どもの遊び場がある
		●放課後に学校以外で友人と過ごす場所や何か食べることのできる場所がある
		●親の送迎がなくても子どもが遊ぶことができる
		小学生以下の子どもが預かってくれる施設がある
		近所の付き合いで短時間子どもを預けることができる
		* 各分野の連携がとれ、質の高い教育を受けることができる
		* 生徒数が多く、子どもの部活動が制限されない環境が整っている
		* 子どもの遊び場に、勉強の場や図書館などの別の機能もついている

利便性		*子どもと高齢者がふれあうことのできる環境がある
		*大人数の子どもの中で、社会的なことを学ぶことのできる環境がある
		*子どもを預ける施設が安価で充実している
		*大人数の中で部活動を通して社会の規律を学ぶことができる
		*子どもが地区の住民に見守られている
		*地区の小学が存続する
		*学校にたくさんの生徒がいる
		*親の運転に頼らずに、自由に移動できる
		*映画祭のイベントを通じて、子どもたちが刺激を受けることができる
		*子どもが勉強できる環境が整っており、大学まで進学させることができる
		*子どもが病気の場合でも子どもを預かる施設がある
		*市内の高校が存続して、高校までは自宅から通わせることができる
		*地域住民で子どもたちを見守り、通学をサポートできる
		*市内で子どもが習い事のできる場がある
		*障害を持つ子どもの居場所がある
コミュニケーション	日常の買い物ができる	徒歩圏内に日常の買い物のできる場所がある
		宅配ではなく、品物の現品を自分で見て選んで買うことができる
		徒歩圏内の店に十分な品揃え(選択肢)がある
		移動販売者の品揃えが豊富
	日常生活の中で必要な手続きが容易にできる	公共交通を使って自力で買い物に行ける
		●価格設定や品揃えが充実していて、市内で買い物できる
		証明書の発行など行政サービスを受ける場所が地区内にある
		郵便や銀行の手続きをすることができる場所が地区内にある
		*高齢者が日常生活を送ることのできる公共交通が整っている
		*公共交通が活用されている
		*若者が集まれるような機能や施設がある
		*自分で車を運転して自由に移動することができる
		*高齢者が徒歩圏内で生活できる
		*短時間で食事を済ますことのできる場がある
		*市内に質の高い商品を提供する店がある
		*質や値段を比べることのできる比較対象になる店が複数ある
		*日常生活の中で、何をするにもいくつかの選択肢が用意されている
		*札幌との行き来が容易にできる
		*商店の品揃えが豊富で、安価な値段で買い物することができる
		*車を持たない高齢者が移動するための手段ができる
余暇	住民同士の付き合いがある	PTA や子どものクラブ活動などを通して、保護者同士が関わり合える機会がある
		地区の集まりに参加できる機会がある(町内会など)
		近所の住民と困ったときに助け合える関係がある
		●同じ世代の住民と付き合いがある
	昔ながらの付き合いが維持されている	●年齢に関係ない付き合いがあり、多世代の意見が取り入れられている
		近所に友人、知人が住んでいる
		●今までの住民同士の付き合いを生かした暮らしができる
		●小学校単位の付き合いが維持されている
	住民同士で集まる場がある	住民が気軽に集まったり、話したりする場所がある
		住民が交流できる地域行事やイベントがある
		●住民同士で集まる場があり、多くの住民が集まりに参加している
		●住民同士で集まる場があり、高齢者が参加できる
		●住民同士で集まる場があり、地域に交流や活気がある
		*外部からの転入者を寛容に受け入れることができる
		*近所に同世代の人が住んでいる
		*地区を超えた住民同士の付き合いがある
		*子どもと高齢者の交流がある
		*ボランティアの利用により、助けあって生活していくことができる
余暇	住民が趣味活動のできる場がある	生活圏内に体を動かせる施設や場所がある(体育館)
		生活圏内にサークルなどの文化活動ができる場所がある
	休日の生活を充実させる場がある	自宅に野菜や花を育てる畑などがある
		自宅以外で週末過ごせるような、飲食店・買い物やスポーツの場がある
		*若者が仕事以外の趣味に打ち込めるような環境がある
		*若者が遊ぶ場所がある
		*市内に娯楽施設がある
		*気分転換のための買い物の場がある

		* 趣味活動の畑が維持され続け、地域の景観の魅力も生み出している * 歩いて行ける範囲に複数の飲食店がある * 楽しみながら住民活動ができる * 高齢者が病院や買い物以外で外出の機会を持てる * 住民同士の付き合いで、新しい知識を得ることができる * 個人が生活の中での楽しみを見つけて暮らすことができる
	除雪がされていて、冬でも暮らしやすい環境がある	- 自力で除雪ができています - 行政サービスで除雪をやってもらえる - 除雪を頼むことのできる人がいる
	治安が良く安心して暮らすことができる	- 自宅の周辺に人が住んでいて安心感がある - 地域に若い人がいて、活気がある ●空家が撤去され、景観や治安が良く安心して暮らすことができる
	快適で暮らしやすい住宅に住んでいる	- トイレ、風呂などの一般的にあるべき機能が住宅に備わっている - 室内が寒くならないように住宅の断熱が十分である ●少数でも質の高い住宅が整備されている ●高齢者が住宅の低層部に住んでいる
		* 誰でも住むことのできる住宅がある * インターネットの環境が整備されている * 高齢者が住み慣れた家で生活し続けることができる * 住宅を選ぶときに、比較対象できる選択肢がある * 毎日お風呂に入ることができる * 自分が建てた家に住み続けることができる * 周囲を気にせず自由に暮らすことができる * 民間のきれいな住宅が整備されていて、希望者は市内に住むことができる
住宅環境		
経済	市内で働くことができる	- 働きやすい環境が整っている - 雇用の機会がある ●市内で働く人のための住環境が整っている ●安価な託児所があり、子どもを預けて働くことができる ●若者が市内で働く場がある
	安定した収入を得ることができる	- 安定した職業に就くことができる - アルバイトやパートなど短期の労働がある ●市内で将来的に安定した収入を得ることができる
	仕事にやりがいを持つことができる	- 仕事にやりがいを持つことができる ●仕事に選択肢があり、やりがいを持つことができる
	生活費の負担を減らすことができる	- 暖房費などの生活費を減らすことができる ●ガソリン代などの生活費の負担を減らすことができる
		* 住民活動を行うことのできる十分な資金がある * 農業の技術を学ぶことができる環境がある * 離農した農家の土地が維持していくための支援がある * 交流人口を増やして、雇用が確保できる * 地区の他の商店に収益を図ることができる * 新規の企業や誘致する企業が参入していくための環境が整っている * 企業が連携して、利益や活動の幅を広げることができる
地域性		
地域性	地区の歴史や文化が存続する	- 地区の歴史や文化を学ぶ機会があり、歴史が守り育てられていく - 地区の歴史や文化を感じながら生活する ●夕張の歴史や文化が存続する ●炭鉱の歴史や映画の文化が存続し、活用される ●地区が存続する ●子どもが歴史や文化を学ぶための行事が存続する
	身近に豊かな自然とふれあう機会がある	- 豊かな自然が保全されている - 自然にふれあう場所や機会が、身近にある ●子どもが身近に豊かな自然とふれあう環境がある ●都会に近いながら、豊かな自然の中で生活することができる
		* 市内の様々な地区が存続する * まちづくりの成果が見える * 住民が地域を愛して、まちづくりに参加している意識を持つことができる * 地区を存続させ、地域に住み続けることができる * 夕張の良さを伝えていながら、交流人口を増やすことができる * 高齢者が地区に住み続けることができる

第3章：計画研究の方法（住民の生活意向に基づいた都市像）

3-1. 都市像の抽出方法

本章では、第2章で把握した各個人の生活意向を担保する都市像を導くことを目的とする。

住民の生活意向を担保するために、各個人の生活意向と各地区状況から、「社会的」「物的」「生活」を視点に、実現する生活像と都市構造を導く。ここで言う都市構造とは、各地区のあり方（地区拠点のあり方、地区に置かれる機能）と各地区のつなぐ都市軸（交通）のあり方として捉える（図3-1）。

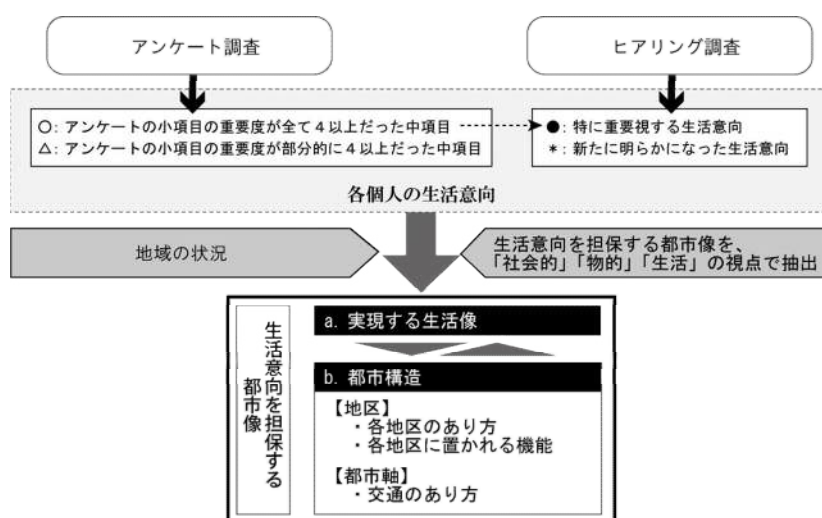


図3-1 都市像の抽出方法

3-2. 住民の生活意向に基づいた都市像

3-1-1の抽出方法に基づき、夕張市住民の各個人の生活意向から都市像を導いた。導く際には、各住民の属性としての基礎情報、生活意向、都市像についてまとめた。

表3-1 住民の生活意向に基づいた都市像の抽出

1. 基本情報	名前 / 性別 / 年齢 / 職業 / 家族の年齢と職業 / 出身地 / 居住地と住居の種類 / その他特記すべきこと(サークルや市民団体への参加等)
2. 生活意向	2章で抽出された8項目に対するヒアリングの結果 【凡例】○: アンケートの小項目の重要度が全て4以上だった中項目 △: アンケートの小項目の重要度が部分的に4以上だった中項目 ●: 特に特記すべき項目 *: ヒアリングにより明らかになった生活意向
3. 将来の都市像	・達成される生活像 ・都市構造(各地区の拠点のあり方、地区に置かれる機能、各地区をつなぐ交通のあり方)

第4章：計画研究の方法（生活意向に基づいた都市像の種類）

4-1. 類型化の視点と方法

3章で明らかになった都市像を、生活意向を支える都市構造の観点から分類する。

なお、前述しているが、集約後に住民の生活意向を担保できる「生活像」を決定する要素として、本研究では都市構造の中でも、「拠点地区」「地区や拠点をつなぐ交通」を都市構造として捉えている。

また、分類された都市像で担保される QOL（＝生活意向）を、2章で抽出された8つの視点に基づき、達成する方法と、実現する生活像について整理した。

4-2. 都市像の類型化

都市構造の観点に基いて、3章で明らかになった各住民の都市像を類型化すると、5つの都市像に類型化された。

①「拠点形成＋住替促進型」

清水沢地区に市街地を集約し、医療・買い物等の機能を集中することで利便性を高め、清水沢地区への住替を促進する。

②「拠点形成＋交通整備型」

清水沢地区に機能を集中させる一方、各地区内で集約する。各地区での生活は暫定的に継続するため、清水沢地区と各地区との公共交通を充実させ QOL を達成する。

③「広域連携型」

清水沢地区と広域交通の便が良い若菜、紅葉山地区に市街地を集約する。市外の医療機能等との連携や、3地区間と市外の交通網の充実により、市外の拠点や施設に行きやすくすることで QOL を達成する。

④「地区間相互補完型」

市街地を JR 線上に集約し、各地区間の公共交通を充実させ、機能を相互補完する。

⑤「地区内自立型」

各地区内で日常生活を送れるようにするために、地区単位で集約する。公共で維持できない医療・買い物・除雪等のサービスは、民間で補完する必要がある。

⑥ なお、2章で明らかになった生活の実態に基づき、集約を行わずに現状を維持し続けた場合の生活像についても整理すると、集約を行わない場合すべての地区住民の QOL を担保することが困難になることが明らかになった。

以下に、各都市像における、都市構造・生活像の詳細についてそれぞれまとめた。

【① 拠点形成＋住替促進型】

■都市像



都市構造	地区	【清水沢地区】：市街地を集約し、医療、教育、余暇、経済等の機能を集中し拠点を形成することで利便性を高め、他地区から清水沢地区への住替を促進する。
	交通	【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：現状を維持する。 公共交通は当分の間は維持するが、交通手段の多くを民間サービスにより補完する。
生活像		【清水沢地区】：徒歩圏内で便利な生活を送ることができる。
		【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：自然に住替しながら、主に民間の輸送サービスや自家用車を利用して、清水沢と行き来する。

■ 8つの視点のQOLを達成する方法と実現する生活像

医療福祉	達成方法	【清水沢地区】：市立診療所を移転し、介護付き集合住宅を整備する。
	実現する生活像	【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：民間の輸送サービスにより不十分な機能を補完する。 【清水沢地区】：いつでも高度な医療を受けることができる。徒歩圏内の病院に通院できる。
教育	達成方法	【清水沢地区】：小・中・高校の連携、学童・児童館・図書館・体育館・保育施設の一体的に整備する。
	実現する生活像	【清水沢地区】：徒歩圏内で、学校の友達と遊んだり、勉強やスポーツができる。 小中高校が連携して、優秀な人材を育てることができる。
利便性	達成方法	【清水沢地区】：市役所を移転し、大規模商業施設を立地させる。
	実現する生活像	【清水沢地区】：徒歩圏内で市質の高い商品を安価な値段で手に入れることができる。様々な日常の用事を徒歩圏内で済ませることができる。
余暇	達成方法	【清水沢地区】：体育施設を移転し、娯楽施設、飲食店を立地させる。
	実現する生活像	【清水沢地区】：徒歩圏内で、様々な娯楽を楽しむことができる。各地区から人が集まってきて、趣味活動を通じた新たなコミュニティが生まれる。
住宅環境	達成方法	【清水沢地区】：多世代交流型集合住宅を整備する。
	実現する生活像	【清水沢地区】：周りに多くの人が住んでいて、活気があり安心して住むことができる。新しい設備の整った住宅に誰でも入居することができる。
経済	達成方法	【清水沢地区】：開発・投資の拠点を形成する。企業誘致する。
	実現する生活像	【清水沢地区】：地域の中でお金が回るようになる。住環境や医療の環境の面で、参入基盤が整い、新たな企業を誘致しやすくなる。生活費の負担を減らすことができる。
コミュニティ	達成方法	【清水沢地区】：地域の大規模な集会施設や、文化・体育施設等の多世代交流拠点を整備する。
	実現する生活像	【清水沢地区】：同世代同士、多世代間の新しい交流が生まれる。 【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：それぞれの地区で、今ある付き合いを大切にしながら清水沢に移り住む。
地域性	達成方法	—
	実現する生活像	—

【② 拠点形成＋交通整備型】

■都市像



都市構造	地区	【清水沢地区】：市街地を集約し、医療、教育、余暇、経済等の機能を集中し拠点を形成することで利便性を高める。
	交通	【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：各地区内で集約し暫定的に生活を維持する。 各地区での生活は暫定的に維持するため、清水沢地区と各地区との公共交通を充実させ、QOLを維持する。
生活像	生活像	【清水沢地区】：徒歩圏内で便利な生活を送ることができる。
	生活像	【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：地区に住み続けながら公共交通を利用して清水沢と行き来する。

■ 8つの視点のQOLを達成する方法と実現する生活像

医療福祉	達成方法	【清水沢地区】：市立診療所を移転し、介護付き集合住宅を整備する。
	実現する生活像	【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：各地区をつなぐ公共交通を整備する。 【清水沢地区】：いつでも高度な医療を受けることができる。徒歩圏内の病院に通院できる。 【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：公共交通を使って高齢者でも通院し、いつでも高度な医療を受けることができる。
教育	達成方法	【清水沢地区】：小・中・高校の連携、学童・児童館・図書館・体育館・保育施設の一体的に整備する。
	実現する生活像	【清水沢地区】：徒歩圏内で、学校の友達と遊んだり、勉強やスポーツができる。 小中高校が連携して、優秀な人材を育てることができる。 【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：放課後バスに乗り地区に戻るまでに、学校の友達と遊んだり、勉強やスポーツができる。
利便性	達成方法	【清水沢地区】：市役所を移転し、大規模商業施設を立地させる。 【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：各地区をつなぐ公共交通を整備する。
	実現する生活像	【清水沢地区】：徒歩圏内で市質の高い商品を安価な値段で手に入れることができる。様々な日常の用事を徒歩圏内で済ませることができる。
余暇	達成方法	【清水沢地区】：体育施設を移転し、娯楽施設、飲食店を立地させる。 【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：各地区をつなぐ公共交通を整備する。
	実現する生活像	【清水沢地区】：徒歩圏内で、様々な娯楽を楽しむことができる。各地区から人が集まってきて、趣味活動を通じた新たなコミュニティが生まれる。 【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：清水沢まで行くことができれば、様々な娯楽を楽しむことができる。
住宅環境	達成方法	【清水沢地区】：多世代交流型集合住宅を整備する。 【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：徒歩圏内に賃貸住宅や空家を中心に地域内集約する。
	実現する生活像	【全地区】：周りに多くの人が住んでいて、活気があり安心して住むことができる。 【清水沢地区】：新しい設備の整った住宅に誰でも入居することができる。

経済	達成方法	【清水沢地区】：開発・投資の拠点を形成する。企業誘致する。 【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：地区内集約して、集まって住む。
	実現する生活像	【清水沢地区】：地域の中でお金が回るようになる。住環境や医療の環境の面で、参入基盤が整い、新たな企業を誘致しやすくなる。生活費の負担を減らすことができる。 【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：除雪の費用や暖房費の負担を減らすことができる。
コミュニティ	達成方法	【清水沢地区】：○清水沢：同世代同士、多世代間の新しい交流が生まれる。 【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：地区内集約して、集まって住む。
	実現する生活像	【清水沢地区】：同世代同士、多世代間の新しい交流が生まれる。 【本庁、若菜、南部、沼の沢、真谷地、紅葉山地区】：それぞれの地区で、今ある付き合いを大切にしながら清水沢に移り住む。
地域性	達成方法	—
	実現する生活像	【全ての地区】：地区の文化や歴史を維持しながら、愛着のある土地に住み続けることができる。

【③ 広域連携型】

■都市像



都市構造	地区	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：清水沢地区と広域交通の便が良い若菜、紅葉山地区に市街地を集約する。市外の医療機能等と連携する。 【南部、真谷地地区】：若菜、清水沢、紅葉山のいずれかの地区に住み替える。 【本庁、沼の沢地区】：現状を維持する。
	交通	若菜、清水沢、紅葉山地区の3地区間と市外の交通網の充実により、市外の拠点や施設に行きやすくなる。
生活像		【若菜、清水沢、紅葉山地区】：徒歩圏内で最低限の日常生活を送る一方で、他の都市と行き来して、地区内では不自由な通院や買い物をする。

■8つの視点のQOLを達成する方法と実現する生活像

医療福祉	達成方法	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：個人病院を立地させながら、市外の医療施設と市内の医療施設を連携させる。 【若菜、紅葉山地区】：各地区間と、市外をつなぐ公共交通を整備する。
	実現する生活像	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：徒歩圏内の病院で簡単な医療を受けられる。救急の対応が必要ときに、市外の高度な医療施設に搬送してもらえる。公共交通を使って、高齢者でも市外の病院へ通院することができるようになる。
教育	達成方法	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：学童や児童館を整備し、3地区内に保育施設を充実させる。
	実現する生活像	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：子どもたちが地区の大人たちの目の届く範囲で過ごすことができる。何かあったときに、すぐにかかけつけられる範囲で子どもを預かってもらえる。

利便性	達成方法	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：小規模商業店舗を立地させ、サロンや郵便局などの行政や銀行の等の手続き施設を維持する。各地区間と、市外をつなぐ公共交通を整備する。
	実現する生活像	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：徒歩圏内で日常の用事を済ませることができる。公共交通を使って、高齢者でも地区外の商業施設等へ出かけることができる。
余暇	達成方法	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：地域交流施設、スポーツ施設を維持する。各地区間と、市外をつなぐ公共交通を整備する。
	実現する生活像	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：徒歩圏内の生活館や武道館などで、サークルなどの趣味活動やスポーツができる。公共交通を使って、高齢者でも地区外の施設へ出かけることができるようになる。
住宅環境	達成方法	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：徒歩圏内に、賃貸住宅や空家を中心に地域内集約し、それぞれの地区の中心部で住宅を立て替える。
	実現する生活像	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：住宅の暖房や除雪の効率が上がり、冬でも安心して暮らすことができる。風呂があるなどより良い設備の住宅に住むことができる。
経済	達成方法	—
	実現する生活像	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：冬の暖房費などの生活費が節約される。
コミュニティ	達成方法	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：地域内集約する。
		【南部地区、真谷地地区】：現在ある近所付き合いの関係を維持しながら、拠点となる3地区に住み替える。
	実現する生活像	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：集まって住むことで、今まで以上に住民の交流が生まれる。
		【南部地区、真谷地地区】：今ある付き合いを大切にしながら、移り住む。
地域性	達成方法	【若菜、清水沢、紅葉山地区】：各地区の特色に基づくまちづくりを実践していく。(若菜：スポーツ文化、清水沢：商業、紅葉山：農業)
	実現する生活像	【全ての地区】：夕張北部、南部を超えずに暮らし続けることができる。 【若菜、清水沢、紅葉山地区】：住民は、個性ある地区の中から好きな地区を選んで暮らすことができる。

【④ 地区間相互補完型】

■都市像



都市構造	地区	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：市街地を JR 上の各地域内で集約し、地域内の施設を維持・整備し、相互補完する。 【南部、真谷地地区】：移転する。
	交通	各地区間の公共交通を整備し、市内の他の地区に行きやすくする。
生活像		【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：徒歩圏内で最低限の日常生活を送る一方で、公共交通で市内の地区を行き来して地区内では不自由な買い物や通院をする。

■ 8つの視点のQOLを達成する方法と実現する生活像

医療福祉	達成方法	【本庁地区】：市立診療所の医療体制を充実させる。 【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：個人病院を立地させる。各地区間をつなぐ公共交通を整備する。
	実現する生活像	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：徒歩圏内の病院で簡単な医療を受けられる。公共交通を使って、高齢者でも市立診療所へ通院することができる。
教育	達成方法	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：学童や児童館を整備し、3地区内に保育施設を充実させる。
	実現する生活像	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：子どもたちが地区の大人たちの目の届く範囲で過ごすことができる。何かあったときに、すぐにかかけつけられる範囲で子どもを預かってもらえる。
利便性	達成方法	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：小規模商業店舗を立地させ、サロンや郵便局などの行政や銀行の等の手続き施設を維持する。各地区をつなぐ公共交通を整備する。
	実現する生活像	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：徒歩圏内で日常の用事を済ませることができる。公共交通を使って、高齢者でも地区外の商業施設等へ出かけることができる。
余暇	達成方法	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：生活館を維持する。
	実現する生活像	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：徒歩圏内の生活館などで、サークルなどの趣味活動ができる。公共交通を使って、高齢者でも地区外の施設へ出かけることができる。
住宅環境	達成方法	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：徒歩圏内に、賃貸住宅や空家を中心に地域内集約し、それぞれの地区の中心部で住宅を立て替える。
	実現する生活像	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：住宅の暖房や除雪の効率が上がり、冬でも安心して暮らすことができる。風呂があるなどより良い設備の住宅に住むことができる。
経済	達成方法	—
	実現する生活像	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：冬の暖房費などの生活費が節約される。
コミュニティ	達成方法	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：地域内集約する。
		【南部地区、真谷地地区】：現在ある近所付き合いの関係を維持しながら、拠点となる3地区に住み替える。
	実現する生活像	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：集まって住むことで、今まで以上に住民の交流が生まれる。 【南部地区、真谷地地区】：今ある付き合いを大切にしながら、移り住む。
地域性	達成方法	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：各地区の特色に基づくまちづくりを実践していく。 (本庁：炭鉱・映画・官公庁、若菜：スポーツ文化、清水沢：商業、沼の沢・紅葉山：農業)
	実現する生活像	【本庁、若菜、清水沢、沼の沢、紅葉山地区】：地区の文化や歴史を維持しながら愛着のある土地に住み続けることができる。住民は、個性ある地区の中から好きな地区を選んで暮らすことができる。

【⑤ 地区内自立型】

■都市像



都市構造	地区	各地区で集約し、地区内で最低限の施設を維持・整備する。公共で維持できない医療・買い物・除雪等のサービスは、民間で補完する必要がある。
	交通	公共交通を維持しながら、不自由な部分は民間の移送サービス等で補完する。
生活像		徒歩圏内で最低限の日常生活を送ることができるが、民間サービスを利用して地区内では不自由な通院や買い物をする。

■8つの視点のQOLを達成する方法と実現する生活像

医療福祉	達成方法	【本庁地区】：市立診療所の医療体制を充実させる。 【全地区】：個人病院を立地させる。各地区間をつなぐ公共交通を維持し、公共で不十分なサービスは民間の輸送サービスや訪問医療を利用し補完する。
	実現する生活像	【全地区】：地区内の病院や、地区に来る民間のサービスを利用して徒歩圏内で簡単な医療を受けられる。公共交通か民間のサービスを使って、高齢者でも市立診療所へ通院することができる。
教育	達成方法	【全地区】：学童や児童館を整備し、3地区内に保育施設を充実させる。
	実現する生活像	【全地区】：子どもたちが地区の大人たちの目の届く範囲で過ごすことができる。何かあったときに、すぐにつけられる範囲で子どもを預かってもらえる。
利便性	達成方法	【全地区】：小規模商業店舗を立地させ、サロンや郵便局などの行政や銀行の等の手続き施設を維持する。各地区をつなぐ公共交通を維持する。公共で不十分なサービスは民間の輸送サービスや訪問販売を利用し補完する。
	実現する生活像	【全地区】：地区内の施設や民間のサービスを利用して、日常の用事を徒歩圏内で済ませることができる。
余暇	達成方法	【全地区】：生活館を維持する。各地区をつなぐ公共交通を維持する。公共で不十分なサービスは民間の輸送サービスで補完する。
	実現する生活像	【全地区】：徒歩圏内の生活館などで、サークルなどの趣味活動ができる。公共交通を使って、高齢者でも地区外の施設へ出かけることができる。
住宅環境	達成方法	【全地区】：徒歩圏内に、賃貸住宅や空家を中心に地域内集約し、各地区の中心部で住宅を建て替える。
	実現する生活像	【全地区】：住宅の暖房や除雪の効率が上がり、冬でも安心して暮らすことができる。風呂があるなどより良い設備の住宅に住むことができる。
経済	達成方法	—
	実現する生活像	【全地区】：冬の暖房費などの生活費が節約される。徒歩圏内で暮らすことができ、交通費が節約される
コミュニティ	達成方法	【全地区】：地域内集約する。
	実現する生活像	【全地区】：集まって住むことで、今まで以上に住民の交流が生まれる。

地域性	達成方法	【全地区】：各地区の特色に基づくまちづくりを実践していく。(本庁：炭鉱・映画・官公庁、若菜：スポーツ文化、清水沢：商業、南部：自然・アウトドア、沼の沢・紅葉山：農業)
	実現する生活像	【全地区】：地区の文化や歴史を維持しながら愛着のある土地に住み続けることができる。住民は、個性ある地区の中から好きな地区を選んで暮らすことができる。

【⑥ 現状維持を継続する場合】



構造都市	地区	現状維持
	交通	現状維持
生活像		現状維持

■8つの視点に基づく生活像

福祉医療	実現する生活像	【全地区】：医療サービスが十分に受けられない住民が発生する。医療体制に不安を感じる住民の市外への転出が増加する。
	教育	【全地区】：生徒数の減少により、教材が十分にそろえられないなど、教育の質が低下する。また、部活動やスポーツの選択肢が減り、子どもの勉強以外の活動にも支障が出る。
利便性	実現する生活像	【全地区】：徒歩圏内で、十分な買い物や手続きをすることが困難になり、車を運転できない高齢者を中心に、生活を維持することが困難になる。車を運転できる住民は、市内で買い物ができなくなり、そのために貴重な休日の1日を毎週費やすことになる。年代を問わず、利便性の高い市外への転出者が増加する。
	余暇	【全地区】：生活の中に楽しみを見つけられず、自宅にひきこもる高齢者が増加する。娯楽施設のある市外への転出する若者が増加する。
住宅環境	実現する生活像	【全地区】：空家が増加し、治安や景観の悪化により安心して住み続けることができない。夕張市の住宅の中で多くの割合を占める公営住宅の老朽化し、居住希望者に対する住宅が不足し、転入希望者が市内に居住できない。冬期の除雪を、個人で行うことが困難な高齢者が増加する。
	達成方法	—
経済	実現する生活像	【全地区】：雇用数の減少が進行し、労働世代が雇用を求めて市外に流出する。住民が買い物などの消費活動を市外で行うため、地域経済の衰退が進行する。
	達成方法	【全地区】：○全地区：人口が激減したことにより、地域のコミュニティが崩壊し、近所付き合いや見守り合いの継続が困難になる。それにより、高齢者の孤独死が増加する。
コミュニティ	実現する生活像	【全地区】：集まって住むことで、今まで以上に住民の交流が生まれる。

	生活像	
地域性	達成方法	【全地区】：各地区の特色に基づくまちづくりを実践していく。(本庁：炭鉱・映画・官公庁、若菜：スポーツ文化、清水沢：商業、南部：自然・アウトドア、沼の沢・紅葉山：農業)
	実現する生活像	【全地区】：地区の文化や歴史を維持しながら愛着のある土地に住み続けることができる。住民は、個性ある地区の中から好きな地区を選んで暮らすことができる。

第5章：都市像の評価

5-1. 都市像の比較

4章で明らかになった都市像を、2章で明らかになった生活意向の観点から比較した。

なお、評価の対象は、都市像の中で描かれた地区の中でも、人が居住し続けることを前提とする地区とした。したがって、①拠点形成＋住替促進型では清水沢地区、②拠点形成＋交通整備型では全地区、③広域連携型では若菜・清水沢・紅葉山地区、④地区間相互補完型では本庁・若菜・清水沢・沼の沢・紅葉山地区、⑤地区自立型では全地区を評価の対象とした。

5-2. 都市像の評価

5-1のそれぞれの都市像で達成する生活像の比較と、この結果に基づいた夕張市まちづくりマスタープラン策定委員会へのヒアリングから、それぞれの都市像について利点・欠点・実現へ向けての課題を明らかにした。

【① 拠点形成＋住替促進型】

利点	生活の拠点が形成されることや、企業誘致のための参入基盤が整うことにより、まちの拠点が明確になる。
欠点	自家用車に乗ることができなければ、それぞれの地区内での生活が不可能になるため、清水沢地区以外に住み続けることを選択する住民のQOLの担保が困難になる。
実現へ向けた課題	各地区の住民の合意形成が最も困難である。そして、拠点を形成する場合にはサービスを提供する場所だけでなく質の確保が重要であり、魅力ある生活空間を形成しなければ、都市像は共有されない。また③の広域連携の視点を、都市像に位置づけなければ、生活の実態と都市像の間に差が生まれることが考えられる。

【② 拠点形成＋交通整備】

利点	生活の拠点の形成・企業誘致のための参入基盤が整うことによりまちの拠点が明確になる。一方で、公共交通が整備されることによって、地区に住み続けながら便利な生活を送ることが可能になる。住民のQOLを最も担保できる都市像である。
欠点	すべての地区で公共交通を整備するため、財政的な負担が大きい。清水沢地区以外では、清水沢と各地区を往来して生活するため、移動に関する身体的、時間的、経済的な負担が大きい。
実現へ向けた課題	①と同じく、拠点を形成する場合にはサービスを提供する場所だけでなく質の確保が重要であり、魅力ある生活空間を形成しなければ、都市像は共有されない。 公共だけでなく民間の移送サービスをコントロールし、小回りのきく交通サービスを提供すると、清水沢の拠点性がさらに向上する。

【③ 広域連携型】

利点	市街地に行きやすい場所の拠点性が向上する。市内では受けられない高度なサービスを市外に求める考え方は、現在の生活実態に最も即した都市構造であり、都市像は市民の間では共有されやすい。
欠点	市外の施設で、買い物や通院等の消費活動を行うことにより、市内の購買力が低下し、市内での消費活動が減少する。
実現へ向けた課題	紅葉山、清水沢、若菜各地区の、市外との交通の玄関口という以外の面での位置づけを明確にすることで、夕張市とその他の都市の生活の中での役割分担が生まれ、交通の利便性以外での利点を持つことができる。

【④ 地区間相互補完型】

利点	ライン状に集約することで、市内の公共交通体系を効率的に整備していくことが可能になる。多くの地区を維持し続けることが可能である。
欠点	市内を相互に移動しないと生活が不可能であるため、移動に関する身体的、時間的、経済的な負担が大きい。地区内に規模の大きな施設を整備することが困難である。
実現へ向けた課題	真谷地、南部地域から住み替える場合の合意形成が困難である。

【⑤ 地区内自立型】

利点	すべての地区を存続させることが可能である。現在ある住民同士の付き合いを維持しながら、徒歩圏内で日常生活を送ることが可能である。
欠点	各地区での買い物や医療サービスの整備や除雪サービスを維持し続けることが困難であり、民間の買い物サービスや医療機関に日常生活の多くを依存することになる。
実現へ向けた課題	公共で十分な生活のサービスを永久的に継続させていくことは困難であるため、時系列で他のパターンへ移行していく必要がある。

終章 住民の生活意向に基づく集約型都市像の計画プロセス

本研究から、以下の6点が整理・考察された。

- (1) 住民の生活意向に基づいた都市像は、市街地を清水沢に集約する①拠点形成＋住替促進型、②拠点形成＋交通整備型、市街地をライン状に集約する③広域連携型、④地区間相互補完型、市街地を各地区内で集約する⑤地区内自立型の5つに分類された。
- (2) 導きだされた都市像のうち②拠点形成＋交通整備型や⑤地区内自立型は、夕張市市街地を集約化する段階的なプロセスとしても解釈できる。
- (3) 住民の生活意向から都市構造を導いたことで、③広域連携型のように、市内で生活が完結しない都市像が導きだされた。
- (4) 都市集約化を図る場合、都市像を共有していくためには、形成する拠点は8つの視点のQOLを担保する魅力的な生活空間である必要がある。
- (5) すべての地区を存続させることは、除雪・買い物・医療等のサービスの継続が難しく、QOLを担保していくことが困難である。
- (6) 夕張市市街地を集約する過程において、残された地区で生活する住民のQOLを維持するために、各地区をつなぐ交通手段を充実させることが重要である。

参考文献

夕張市：夕張市史

夕張市：広報ゆうばり，2008年－2010年

北海道立北方総合建築研究所：公営住宅の整備・維持計画策定支援プログラムの開発，2009年

蓑原敬：地域主権で始まる本当の都市計画・まちづくり，学芸出版社，2009年

瀬戸口剛：夕張における公営住宅の集約・再編による都市コンパクト化，日本都市計画学会都市計画第275号，PP.64-68，2008年

夕張再生市民会議：夕張再生市民アンケート調査報告書，2008年

西沢隆：人口減少時代の資産形成，東洋経済新聞社，2005年

資料：「まちづくりの再編パターン」の分類

	都市像1 拠点形成+住替促進型 【清水沢への再編】	都市像2 拠点形成+交通整備型 【清水沢への再編と岡地内再編】	都市像3 広域連携型 【栗山など他のまちとの連携】	都市像4 地区間相互補完型 【JR線状への再編】	都市像5 地区内自立型 【各地区での自立】	現状維持
まちの構造	＜凡例＞ 輸送サービス：……… 住居と施設機能の再編：……… 住居の再編：………	＜凡例＞ 公共交通：……… 施設機能の再編：……… 住居の再編：………	＜凡例＞ 公共交通：……… 住居と施設機能の再編：……… 住居の再編：………	＜凡例＞ 公共交通：……… 住居と施設機能の再編：……… 住居の再編：………	＜凡例＞ 公共交通+輸送サービス：………	
地区	清水沢 ：医療／教育／商業／余暇／経済活動の都市機能の集積 本庁 若葉 紅葉山 沼ノ沢 南部 真谷地 ：現状維持	清水沢 ：医療／教育／商業／余暇／経済活動の都市機能の集積 本庁 若葉 紅葉山 沼ノ沢 南部 真谷地 ：公営住宅の岡地内再編	清水沢 若葉 紅葉山 ：地域内再編 ：拠点地区の生活機能の維持／充実 南部 真谷地 ：住替促進 本庁 沼ノ沢 ：現状維持	本庁 若葉 清水沢 沼ノ沢 紅葉山 南部 真谷地 ：地域内再編 ：地区内の生活施設の維持／充実	本庁 若葉 清水沢 沼ノ沢 紅葉山 南部 真谷地 ：現状維持	本庁 若葉 清水沢 沼ノ沢 紅葉山 南部 真谷地 ：現状維持
交通	清水沢への公共交通（バス／JR）を主に利用	清水沢への公共交通（バス／JR）を主に利用	地区間や市外間を移動する公共交通（バス／JR）を主に利用	地区間を移動する公共交通（バス／JR）を主に利用	公共交通を主に利用し、各輸送サービスなどを利用	：各輸送サービスを主に利用
生活像	清水沢 ：徒歩圏の中で多くの世代が働き、暮らすことができる便利な生活 本庁 若葉 紅葉山 沼ノ沢 南部 真谷地 ：清水沢への自然な住み替えを促し、主に公共交通サービスを利用しながら清水沢行き来する生活	清水沢 ：徒歩圏の中で多くの世代が働き、暮らすことができる便利な生活 本庁 若葉 紅葉山 沼ノ沢 南部 真谷地 ：各居住地区に住み続けながら、主に公共交通サービスを利用しながら清水沢行き来する生活	清水沢 若葉 紅葉山 ：徒歩圏内で最低限の日常生活 本庁 沼ノ沢 ：公共交通を主に利用して市内の地区間を行き来しながら、居住地区内だけでは不十分な買い物や通院などを地区間で相互に補完しながら送る生活	本庁 若葉 清水沢 沼ノ沢 紅葉山 南部 真谷地 ：徒歩圏内で最低限の日常生活 ：公共交通を主に利用して市内の地区間を行き来しながら、居住地区内だけでは不十分な買い物や通院などを地区間で相互に補完しながら送る生活	本庁 若葉 清水沢 沼ノ沢 紅葉山 南部 真谷地 ：公共交通を主に利用し、各輸送サービスなどを利用しながら、市内で多くの買い物や通院、飲食などをする生活	本庁 若葉 清水沢 沼ノ沢 紅葉山 南部 真谷地 ：公共交通を主に利用し、各輸送サービスなどを利用しながら、市内で多くの買い物や通院、飲食などをする生活